



福島県 小学校長会 会報

- 巻頭言 1
- 教育ニュース 2
- 特集「福島に誇りをもち 多様な他
者と協働しながら 持続可能な社会
を創る子どもの育成」 3～6
- 支会だより 7～10
- ふくしま人 この道に生きる 11
- 表彰・令和8年度行事予定 12



継承とアップデート

福島県小学校長会副会長 鈴木 和 一 郎

現在の学校に赴任して4年が過ぎようとしています。本校は、2年前に創立150周年を迎えた地域に根ざした伝統校です。本校の同窓生が商店主や地元企業のリーダーとなっていて、何かと応援してください。創立150周年記念式典では、同窓会役員の皆様が企画・運営面や資金面などのほとんどを担ってくれました。本校のまわりには母校愛に溢れている方がたくさんいます。

そんな本校のシンボルツリーが「けやきの木」です。明治時代に植樹された記録が残っていますが、現存する6本の樺は戦後すぐの頃や東日本大震災後などに植樹されたものです。それぞれ「元気のけやき」「本気のけやき」「根気のけやき」「勇気のけやき」「希望のけやき」「絆のけやき」と名前がついています。その中の1本、およそ樹齢100年と思われる「元気のけやき」が、すでに6割ほど腐朽していることがわかりました。そこで、同窓会やPTA、元本校の校長の方々、市教委のご意見を伺い、後継の樺の木と植え替えることにしました。今年度の12月に伐採・抜根作業をして、3月の卒業式前には同じ場所に植樹する予定です。

実は、地域から愛されている学校のシンボルツリーの植え替えということで、反対される方も多いのではないかと覚悟していました。しかし、今のところ校長の私のところに、反対意見は1件もありません。同窓会役員などに相談した際には、すべての方が、児童の安全が第一で学校施設や他の人に迷惑がかかってからでは遅いと言ってくださいました。これから、その他の樺の木も順次年老いていくことが予想されます。創立200周年の頃にも地域から愛されるシンボルツリーであり続けるためのアップデートだと考えています。その頃には現在の児童たちが同窓会役員になっていることでしょう。

さて、校長職や校長会に目を向けると、目の前にいる児童のこのことのみならず、地域や社会全体を見据え、教育の充実発展や教育条件の整備に力を尽くしていくのが責務と考えます。東日本大震災後には、児童の安全と安心を最優先にして、混乱した教育活動をどう立て直すかに知恵を絞ってきました。また、原発事故によって生じた数々の課題にも立ち向かってきた結果が今に繋がっています。しかし、昨今では児童はもちろん、先生方の中にも大震災の記憶が薄くなっています。教訓をどう継承していくかが課題です。戦争による教訓を継承している広島や沖縄などのように、復興後の継承は我々福島に課せられた宿題ではないでしょうか。

コロナ禍で得た教訓もまた同様です。例えば、感染防止対策のノウハウは、今回のインフルエンザ流行から児童や教育活動を守ることに役に立っているだろうか。オンラインによる授業や会議のメリットとデメリットを知る機会となりましたが、現在の活用方法はメリットを最大に、デメリットを最小にする工夫がなされているだろうか。過去の出来事を教訓として、価値を再評価し、これからの未来に役立つものにアップデートしていくことが教育の充実発展には欠かせません。

考え方や時代の空気によって、アップデートするポイントは違うでしょう。しかし、本質を見抜き、改善を重ねることで、よりよい教育環境は築かれていくと思います。児童にとっても、先生方にとっても、これから教員や校長を目指す人にとっても、よりよい学校であり続ける努力を、力を合わせて続けていきましょう。

学びをつなぐ

福島県教育庁義務教育課 課長 佐藤 敏宏

春の息吹を少しずつ感じる季節となりました。子どもたちの健やかな成長のために、日々尽力されている皆様に、深く敬意を表します。

今年、明治9年8月21日に福島県が誕生してから150周年を迎える年です。また、東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故から15年が経過すると共に、第3期復興・創成期間の初年度の年でもあります。令和8年度は、様々な意味で節目の年となります。

各校におかれましては、今年度の教育活動の総括と共に、次年度に向けた諸準備も大詰めの頃と存じます。

さて、この3月に卒業を迎える6年生は、コロナ禍の入口の時に小学校入学を迎えた子どもたちです。長期間の臨時休業やマスクの常時着用など、学校生活だけでなく社会的にも先の見えない不安の中で、小学校での学びを始めた子どもたちです。同時に、この子どもたちは、急激に進んだGIGAスクール構想による1人1台端末を活用した学びを、初めて低学年からしてきた子どもたちでもあります。端末の活用は今では日常的になり、個別最適な学び、協働的な学びの一体的な充実のためには、不可欠なものとなっています。

しかし、テクノロジーが進歩すればするほど問われるのは、人としての「対話力」であると感じています。「対話」と似た言葉に「会話」があります。辞書的には、「会話 (conversation)」は日常的な雑談や情報伝達、「対話 (dialogue)」は、単なる情報伝達ではなく、相互理解を深め、共感や行動の変化などを生み出すものとされています。多様性の包摂や、複雑な課題の解決には、「対話力」は重要です。ICT機器を使いこなしながら

も、元来、本県の子どもたちに見られる周囲の人と協力し、支え合う姿や、感謝の気持ちを忘れず人に優しく接する姿等を大切にしながら、「VUCAの時代」と称される不確実な現代社会を生きる力をどう育てていくかが、私たち校長に求められる経営力ではないでしょうか。

様々な考えはありますが、「VUCAの時代」に対応するためには、時間をかけて完璧な計画をつくるよりも、素早く実行して改善を繰り返す俊敏さ (agile) や、失敗や予期しない変化に直面してもしなやかに立ち直る回復力 (resilience) などが、必要といわれています。子どもは、幼児期にはやってみたくと思ったことを試行錯誤しながら繰り返しチャレンジしたり、友達と遊ぶことを通して協力することや人との関わりに気付いたりします。このような経験や学びを小学校へそして中・高の学びへとつなげていくことが、これらの力を育む方策の一つかもしれません。

次期学習指導要領改訂に向けた審議の中で「質の高い探究的な学び」が話題となっています。

子どもが自立した学習者として学びを進めていく上でも、これらのことは必要なことと考えられます。

結びに、「職員室は教室につながっている」と言われます。また、「子どもの学びと教員の学びは相似形」とも言われます。私たち校長が、教員の学びを支えていくことは、子どもの学びと成長につながっています。地域や学校の課題はそれぞれ異なりますが、子どもの幸せを願う気持ちは同じです。まずは、私たちが、共に知恵を出し合いながら、しなやかにたくましく、教職員と子どもたちのために歩んでいきましょう。

福
島

地域の素材を生かした 探究 活 動

～地域人材との協働的連携を通して～

福島市立福島第三小学校 齋藤 仁道

1 はじめに

本校学区及び周辺には信夫山や阿武隈川などの自然、市役所や消防署などの行政機関、音楽堂や競馬場、ラジオ局などの社会的施設が見られ、生活科や総合的な学習の時間の素材が数多く存在する。

それらの地域の素材を子どもの興味・関心、教師の意図を踏まえて教材化している。そして、子ども達の探究を促進・進化させるために地域人材との協働的連携を深め、実践に取り組んでいる。

2 地域人材との協働的連携

地域の「人」との関わりで大切にしているのはその人の生き方にふれることである。「〇〇さん」の取組を知り、その生き方から感じ、考えたことを自分との関係で問い続ける子どもの姿を目指している。そこで、次の2点に留意している。

1つ目は、実践のパートナーとも言える地域の方々とは本校で育てたい子どもの姿、単元の目標を共有し、子どもに関わるスタンス（あえて壁となり課題に気付くことができる関わりなど）を理解いただいた上で連携を図ること。

2つ目は、地域の方への連絡や依頼を自分たちで行うことができるような、子どもの社会性やコミュニケーションスキルを高めることである。以下、2つの実践を紹介する。

(1) 第4学年「ずーっとつなげ 100年のバトン ～本気の五十辺太鼓～」

本単元は、五十辺地区の伝統文化の継承に尽力する方々とのかかわりを通して、地域のよさに気づき、自分の生活を見つめることがねらいである。主な活動内容は次のとおりである。

① 五十辺太鼓に親しもう

地域の歴史や伝統行事などについて、五十辺太鼓保存会の方から話を聞き、伝統文化を守る方々の思いを学んだ。また、五十辺太鼓の体験活動に参加し、保存会の方々との関わりを通して単元の課題を設定した。

② つなげ！五十辺太鼓大作戦

太鼓を継承する人が少ないなどの問題を解決するために、保存会の方々と相談しながら自分たちにできる方法を考え、実践計画を立てた。



<地域の歴史を学ぶ>



<太鼓の練習>

③ ずーっとつなげ！五十辺太鼓大作戦

校内発表会を企画し、五十辺太鼓の演奏を披露した。さらに地区の活性化への取組を行っている団体とコラボし、地域の魅力を発信した。

(2) 第5学年「創って広める！

～ゆず made in 信夫山～

本単元は、信夫山のゆずについて調べ、生産者の思いや苦労について理解し、自分たちにできることを考え、地域おこしを支える意識をもつことがねらいである。主な活動内容は次のとおりである。

① 信夫山のゆず、「今」を考える

信夫山のゆず畑を見学し、農家の方々の作業内容を知り、後継者不足などの問題について考えるを通して、単元の課題を設定した。

② チャレンジ！自分たちにできること

震災後、ゆずの栽培見送りや出荷制限など、生産活動が難しくなっている現状をもとに、各地のゆずの生産状況や活用方法を調べた。また、農家の方々とゆずの収穫作業を行った。



<ゆず生産の現状を知る>



<ゆずの収穫作業>

③ オリジナル〇〇を創って広めよう！

信夫山産ゆずを使った石けん、ジャム、クッキーなど、ゆずの多様な活用方法を考え、学区内の高校生と協力して商品化への可能性を探った。

3 むすびに

地域の素材が豊富で、地域の方々が協力的であるという利点を生かし、本校ならではの教育活動が展開できるよう校長としてのビジョンを示し、地域とのより良い関係を築いていきたい。さらに、子どもの主体的な探究活動を通して地域のよさに気づき、自分の生き方を見つめ直すことができるように、今後も全職員で実践に取り組んでいきたい。

伊達

「伊達ならではの」の取組を通した子どもの育成

伊達市立上保原小学校 五十嵐 修

1 はじめに

伊達支会では令和6・7年度に「基礎的・汎用的能力を育成するキャリア教育の推進」のテーマに取り組んだ。校長の確かなビジョンのもと「キャリア教育を明確に位置づけ、系統性を踏まえた教育課程の編成、教職員の意識や指導力の向上、家庭・地域や関係機関等との連携・協働など、学校、地域の特色を生かしながら意図的・計画的な推進を一層充実させていくことが必要である」と考え、各校で実践してきた。この中で、「各校ならではの教育」「地域との協働」について以下の通り取り組んだ。

2 伊達ならではの取組

(1) アセスメントシートを通した各校の取組

伊達地区独自のアセスメントシートを有効に活用し、校長が行う具体的な働きかけを明確にして取り組んでいる。各校ならではの特色ある教育活動や地域の特色を生かした内容が多く報告されている。具体例を挙げてみる。

<各校ならではの特色ある教育活動>

- ・学校目標に関する取組への児童参画を目的とした委員会活動
- ・現職教育を活用した学級活動の実践
- ・縦割り班活動におけるキャリア教育の視点からの再構築と活性化
- ・キャリアパスポートの活用

<地域の特色を生かした内容>

- ・ふるさと学の推進と地域人材の活用
- ・地域の特別支援学校との連携
- ・地域の果樹農家との連携

(2) 本校における取組

伊達地区と言えば果物。本校では、毎年、3年生が「アップル探検隊」と称して地域の果樹農家の方々にお世話になりながら体験活動をさせていただいている。



果樹農家の方の話

今年度も春先から、リンゴの受粉作業、摘果作業、リンゴの実への模様付け、そして収穫を体験させていただいた。



満面の笑みでリンゴの収穫

各自が選んだリンゴの実に継続的に関わり、収穫を迎えた表情はひとしおだった。1年間関わることで、果物が収穫できるまでの過程について学んでいくとともに、果樹農家の仕事内容ややりがい、苦労などを知る機会にもなる。果樹農家という仕事のキャリアについても触れる機会となる。リンゴの実も大きくなるが、子どもたちの心の中でも郷土愛が確実に大きくなっていくような学習になればと考える。

また、地域の交流館にお世話になりながらの各種教育活動も地域のよさを実感させるために重要な意味を持つと考える。主な活動として、交流館見学（2年生）、交流館のボランティア清掃活動、稲わらを使っての正月飾り作り（いずれも5年生）、団子飾り作り（2年生）などである。

関わってくださる方々の様子を見ると、活動の中から子どもたちの成長を感じ取り、喜んでくださっている。子どもたちも、地域の方々に親しみをもって接している。まさに協働である。感謝の気持ちと地域愛を育てるべく、カリキュラム



育てた稲わらで しめ縄作り

マネジメントを生かして地域教材を再考・整備し、より具体的な地域連携のかたちを明確にしていくことが必要だと考える。

3 むすびに

今年下期には、本地区内に東北地方最大と言われている大型ショッピングモールがオープンする。取り巻く環境は大きく変化していくであろう。それも地区の強みの一つとしていかなくはならないと考える。また、地区内には地域の催しや活動が数多くある。そのような機会に積極的に参加することも、地域のよさを実感する方策だと思う。校長として積極的に地域に関わり、地域を知り、地域と一体となって未来を担う子どもの教育にあたっていきたい。

安
達

ふるさとに誇りをもち、人々とつながり
地域をつくる子どもの育成
～ ふるさと学習を通して ～

二本松市立二本松南小学校 太田 孝志

1 はじめに

本校は、二本松市の中心部に位置し、戒石銘の理念をもった藩士を育成する目的で作られた、二本松藩校「敬學館」の流れをくむ伝統校である。

【教師自身が範たるべく常に己を律し磨いていくことを大前提とし、＜学問を大切にすること、学ぶ子どもを大切にすること、学び導く教師を大切にすること、学びの基盤となる地域を大切にすること＞】という「敬學の精神」が現在も本校の教育の基調として掲げられている。

学びの基盤となる地域のよさを知り、地域を愛し誇りをもち、魅力発信や地域のために活動する児童を目指し、本校だからこそできる充実した教育活動の実践に努めている。



2 人々の思いに触れ、地域をつくる子どもの育成

(1) 地域の伝統文化や歴史との関連から

二本松少年隊や二本松提灯祭りなどの伝統文化や歴史、和菓子などの産業も受け継がれており、地域の方々との結びつきも深い。10月に3日間開催される二本松提灯祭りは、小若として参加する児童も多く、地域が総ぐるみで行う伝統行事でもある。



2年生の生活科町探検では、提灯店や太鼓店、和菓子屋などを訪問し、本物に触れ学んでいる。

3年生の総合的な学習の時間「二本松のまちじまん」では、提灯祭りのことについて調べている。市教育委員会文化課、若連や町内会の方など、様々な立場の方から祭りへの思いや知識、文化的価値を学んでいる。そして、学習発表会等で発表し、自分たちも継承していくことへの意識を高めている。5年生では、伝統文化の職人の方の思いなどに触れ、和菓子作りや二本松万古焼体験を行っている。各学年で、地域の方とのつながりを大切に学んでいる。



6年生の社会科では、地域教材を活用した江戸時代の学習を行っている。二本松提

灯祭りの起源をもとに、二本松藩や二本松の多様な立場の人々の思いが今も受け継がれていること、地域の歴史の延長線上に自分や二本松南小学校が存在し、今の生活があること、そして、伝統や文化を継承し、地域や社会をさらによりよくしていくのは自分たちであるという意識を高めている。

地域の方とも「地域の魅力発見座談会」や、郷土料理「ざくざく」を一緒に作る活動を行うなど、積極的に交流している。地域の一員としての自覚を高め、地域のために、自分たちには何ができるかを考え、実践するよい機会となっている。



(2) 自然環境との関連から

4年生では、安達太良登山や森林環境学習を行っている。山の会や地域のガイドの方とともに、地域の自然について学んでいる。そこで気づいた自然の恵みや素晴らしさ、身近な環境問題について学び考えたこと、自分たちにできることを学習発表会で伝え、地域のクリーン作戦やポスターを作成し呼び掛けるなど活動が広がっている。



3 むすびに

地域の歴史や文化、自然、人々の思いに触れるふるさと学習をとおして、子どもたちは生まれ育った地域を、より深く知り、地域への愛情と誇りを抱いている。また、多様な人々との関わりをとおして、協働の大切さを学び、地域社会の一員としての自覚や意識を高めている。

本校の【地域を大切にすること】という「敬學の精神」が、自分の生き方と深く関わりがあることを意識し続け、「地域をつくる、地域を動かす」という、持続可能な社会を創る子どもの育成につなげていきたい。今後も「本校でしかできない学び、本校だからこそできる学び」を実践していきたい。

郡山

「探究的な学び」を通して
地域のよさに気付く
未来を切り拓く子どもの育成

～うねめまつりを盛り上げよう～

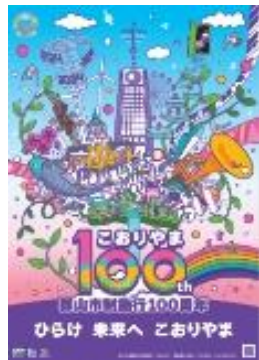
郡山市立芳山小学校 難波 和生

1 はじめに

本実践は、郡山市制施行 100 周年という身近な地域の出来事を学びの起点とし、地域行事であるうねめまつりを題材に、地域の人々との関わりや本物の体験を通して、地域の魅力や課題に主体的に向き合う学びを構想した。探究的な学習活動を通し、正解のない課題に粘り強く取り組む力や、地域の一員として考え行動する態度の育成をねらいとした実践である。

2 テーマに関する実践

5 年生の子どもたちは、学校に貼ってあった 1 枚のポスターに出会った。そのポスターは自分たちの故郷である郡山市の市制施行 100 周年を祝うポスターである。そのポスターを見た瞬間に、子どもたちの目は輝き出した。「郡山市って 100 周年なの?」「見て! がくとくん!」「鯉も描いてある!」子どもたちは歓声をあげ、発見を仲間と共有した。子どもたちが、郡山市の魅力と向き合い始めた瞬間であった。自分たちも 100 周年の郡山市を盛り上げたいと学びは動き出した。その中で、子どもたちは「うねめまつり」に着目した。「うねめ伝説」に「うねめ太鼓」、そして「うねめ踊り流し」と新たな踊りである「采女ドンドコ」、それぞれテーマを決めてうねめまつりの魅力に迫っていった。魅力的な「もの」「こと」を知ろうとすると、必ずそれに携わる「ひと」と出会う。実行委員の方やうねめ太鼓保存会の方、地域の方、何度も何度も関わり、その思いに触れ、自分たちの思いを深めていった。祭りを愛し、祭りを守ろうと本気になっている大人は、子どもたちにとって憧れの存在となった。大人は子どもたちに、本音を語る。子どもだからという特別感はなく同じ仲間として思いをぶつけてくる。その思いはいつしか自分たちの思いとなった。また、実際に太鼓演奏を体験したり、踊り流しをしたりしたことで、「うねめまつりにもっと参加してほしい。その魅力を伝えよう。」と学び



を深めていった。自分の言葉でうねめまつりの魅力を語り出す子どもたち。そこには、今までの本物の体験と思いが込められていた。

子どもたちの「伝えたい」という思いは、学校から保護者、そして地域へと対象を広げていった。「地域の人はいかにうねめまつりをどう思っているんだろう」と考えた子どもたち。QR コードアンケートや街頭インタビューを行い 750 人の地域の声を集めた。質問内容は、仲間と何度も精査した。街頭インタビューでは「つまらない、興味がない」のような厳しい声に現実を感じた。それでも、いつも仲間と支え合って学んできたからこそ、次の新たな一歩を考える。まさにうねめまつりが「自分事」になっていた証である。「こんなに魅力的なのに…」という思いから、あきらめない子どもたちは、「祭りの課題と改善点を、祭りの主催者の商工会議所に提案しよう」と学びを進めていった。3 月、子どもたちは商工会議所の会議室で、自分たちが学んだ祭りの魅力や新しい祭りのアイデアを提案した。そこには、子どもたちの真剣な思いが込められていた。その提案を本気で受け止める商工会議所の方々。立場を越え、地域に生きる「ひと」と「ひと」との本気の対話が生まれていた。

そして迎えた 2025 年のうねめまつり。そこに



は、子どもたちの学びが生かされた新しい祭りの姿があった。祭りに参加し、自分たちの学びを実感する子どもたち

は、笑顔であふれていた。

子どもたちは今も、「郡山市を誇りに思っている」という思いを胸に、「自分に今できることは何だろう」と問い続け、学び続けている。

3 むすびに

本実践を通して、子どもたちは地域を題材とした探究的な学びの中で、学びを自分事として捉え、主体的に学び続けた。地域の人々との対話や本物の体験を重ねることで、地域の魅力や課題を自分の言葉で語り、社会に向けて発信・提案する力が育まれた。今後も、総合的な学習の時間を核に、地域と連動した探究的な学びを充実させ、子ども一人一人が社会の一員として学び続ける力の育成を図っていきたい。

福
島**今年度の活動を振り返って**

～子どもたちと学校の未来を見据えて～

福島市立飯坂小学校 小川 尚子

1 はじめに

福島支会は、福島市及び川俣町の国公立学校の校長によって組織され、今年度は昨年度より1校減の44校で活動しています。再編した5方部(東、西、南、北、信陵・飯坂)を基盤に、全会員が参加する年5回の定例会では、教育課題や学校運営に関する研修会を実施し、教育の質の向上と学校運営の充実を目指しています。

2 今年度の取組**(1) 定例会・ニーズ研修**

第2回定例会では、「第54回福島県小学校長会研究協議会安達大会」に向けたプレ発表会を開催しました。県小学校長会研究部幹事の校長先生方のご指導をいただきながら、各方部研究の発表内容等について協議し、共同研究の成果がより充実したものとなるよう、発表方法や資料の改善点を確認しました。

第3回定例会のニーズ研修は、生徒指導部が担当し、「学校における虐待対応の基本」と題して、福島県中央児童相談所専門児童福祉司 奥山直子様から講話をいただきました。虐待の早期発見の視点や学校の対応の在り方について、具体的な事例をもとに研鑽を深めました。

第4回定例会のニーズ研修は、行財政部が担当し、今年度実施した「教職員配置等に関する調査報告」を基に「自校における人材育成の在り方を考える」をテーマとしたグループワークを行いました。今後の学校経営の方向性やキャリアステージに応じた効果的な取組、校長としての指導・支援の在り方について情報共有を図りました。

(2) 学校経営研修会

福島地区中学校長会と連携し、新任校長や他地区から着任した校長を対象とした人事事務研修を実施しました。また、ミドルリーダーや管理職昇任志願者を対象とした講義や模擬面接を行い、本地区の教育を担う人材の育成に努めました。

3 むすびに

今後も子どもたちと学校の未来を見据え、校長会の役割を明確にしながら、持続可能な教育環境の構築と教育の質の向上に向けて、会員の英知を結集し、一丸となって取組を進めてまいります。

し
ら
か
わ
西**今年度の活動報告**

～県南は1つ チームしらかわ～

白河市立小野田小学校 関根 敦子

1 はじめに

本支会は、白河市、西郷村、中島村、矢吹町、泉崎村、棚倉町、塙町、矢祭町、鮫川村の1市4町4村の公立小学校34名の会員で組織されています。今年度は、新任1名を含む7名の新会員を迎えました。

5つの班ごとに研究を推進すると共に、年間3回の研修会を実施しています。また、「県南は1つ」の合い言葉のもと、横のつながりを大切に協働しながら、諸活動を推進しています。

2 今年度の取組**(1) 研究の推進**

本支会では5つの班それぞれが、県の研究テーマに沿って研究を進めています。

今年度は県大会での発表に向け「目指す学校づくりのための組織・運営の活性化と校長の在り方」～未来を切り拓く力を育む学校経営・運営ビジョンの策定・推進～を同一テーマとして全ての班で研究実践を行ってきました。第1回研修会においては、発表内容について検討を行い、研究を深めました。また、第2回研修会では5つの班ごとに今年度の実践内容についての協議・まとめを行うと共に、次年度以降の研修の方向性について協議し、研究の見通しをもつことができました。

(2) 教育研究会

第1回研修会では、県南教育事務所長 平山 明裕 様、第2回研修会では県不登校児童生徒支援センター指導主事 加藤 真理子 様を講師に招聘し、福島県の教育の現状や課題についてご講話をいただきました。現状を見据えたより良い実践につながるお話をいただき、その内容を各学校の教育活動に活かしています。

3 むすびに

講師不足や新採用教員の割合の増加、管理職を目指す人材の育成、働き方改革等、学校における課題は年々増加しています。「県南は1つ」の合い言葉のもと、横のつながりをより一層強化し、県南全体の教育力向上に努めてまいります。

耶
麻

「耶麻は一つ」

～みんなで研究、みんなで実践～

喜多方市立高郷小学校 塩生 敬久

両
沼両沼はひとつ
一丸となって

柳津町立柳津小学校 大越 久

1 はじめに

耶麻支会は、1市1町1村（喜多方市、西会津町、北塩原村）19名の会員で構成されています。今年度も「耶麻は一つ」を合言葉に、相談しやすい和やかな雰囲気のもと、耶麻地区の子どもたちの教育を充実させるために活動を推進しています。

2 今年度の取組

(1) 研究の推進

今年度は令和6・7年度の継続研究として「1経営、組織・運営」「7学校安全」「9自立と社会性」の3班編成で校長と「誰と」「どのような関わり」を意識しながら研究に取り組んできました。

その中で、「9自立と社会性」のグループは、「視点1 子どもの自立と社会参加を図る特別支援教育の推進」について、五つの観点を定めて研究を推進し、県研究協議会安達大会第9分科会で研究内容を発表しました。

(2) 地区研修会

総会の他に4回の研修会を実施し、その中で、「本県の不登校児童生徒の現状と不登校児童生徒支援センター(roomF)における支援について」（講師：義務教育課主任指導主事 肥沼様）、「スクールロイヤーと学校でのトラブル対応」（会津みらい法律事務所弁護士 大野様）の講話・講演をいただき、学校運営をしていく中で、課題になりやすい不登校、いじめ、SNSの問題、保護者対応などについて対応や支援の方法等の研修を深めました。

(3) 各専門部地区研修会

行財政部、研究部、生徒指導部、広報部を設け、各部の計画に沿って、部長を中心に活動を行いました。

(4) 人材育成

中学校長会、小・中学校教頭会と連携し、教頭・教諭等を対象に学校経営研究会を開催し、学校経営・運営の専門性、教職員としての資質・能力の向上を図る研修会を6回実施しました。

3 むすびに

耶麻支会は、会員相互の横のつながりがあり、情報交換などを行いながら、協働して活動しています。各校の工夫された実践や活動を学び合いながら、子どもたちのための学校運営を目指して活動していきたいと思えます。

1 はじめに

両沼支会は、5町2村（会津坂下町、会津美里町、柳津町、三島町、金山町、湯川村、昭和村）の13名の会員で組織されている。今年度は、3名の新会員を迎え活動を行ってきた。昨年度末、金山町の金山小学校と横田小学校の統合により、会員数が1名減少したが、これまで以上に会員相互の関係を密にし、活動に取り組んできた。

2 今年度の取組

(1) 研究の推進

本年度は、県大会の発表地区であることから研究テーマとして「健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントの推進における校長の役割と指導性」の視点2「健康で安全な生活を営む実践力を育てる教育活動の推進」を掲げ、全会員で研究を進めた。6月に支会大会を開催し、代表者発表をもとに、昨年度から進めてきた研究のまとめと最終確認を行い、8月の本発表に臨むことができた。

(2) 各専門部の活動

両沼支会は、行財政部、研究部、広報部、生徒指導部の4専門部を設けて活動してきた。部長を中心に計画的・組織的に進めることができた。

(3) 現職・退職校長会教育懇談会

夏季研修会終了後に小中合同による、現職・退職校長会教育懇談会を開催した。7部会に分かれ、意見交換を行った。懇談内容は、主にコミュニティスクールや学校地域連携、働き方改革についてであった。

3 むすびに

教職員の授業力向上、働き方改革、不祥事根絶、学校が抱える課題への対応、また、理想とする学校経営の実現などについて、この会を通して情報を共有し、「両沼は一つ」を合言葉に進めてきた。退職校長会等の方々とも連携しながら、会員同士の結びつきをより一層強め、全員一丸となって取り組んでいきたい。

南
会
津**理想の教育のある南会津を目指して**～人材育成と人材確保のために～
只見町立朝日小学校 神田 忠恒**1 はじめに**

南会津支会は、4 町村（南会津町、下郷町、檜枝岐村、只見町）13 名（檜枝岐小は小中兼務で中学校籍）の会員で構成されている。中学校と合わせても 20 名と少人数の支会なので、小中一緒に活動することも多く、結びつきの強い支会である。今年度も学校間の連携を密に、課題の解決と学校経営の充実のため、活動してきた。

2 今年度の取組**(1) 東北連小秋田大会及び県小学校長会研究協議会安達大会に向けた実践研究**

本支会では「様々な危機への対応と未然防止の体制づくり」視点 1 において「重層的支援構造をもとにした方策と校長の在り方～実効性のある教育課程づくりを目指して～」と題し、実践研究を行い、各大会にて発表した。発達支持的・課題予防的生徒指導を観点に教育課程の取組や好事例を共有し、校長のリーダーシップのもと、自校の教育課程の見直しや再編へつなげ各校の教育活動の充実を図った。その結果、地域・保護者とのより一層の連携が図られ、いじめ・不登校等の未然防止につながっている。

今後は、校長の働きかけを継続し、人的な配置や各種教育活動の充実によるいじめ・不登校等の未然防止の体制の整備を進めたい。

(2) 人材育成・人材確保のため

本年度より、本支会のストロング・ポイント（子どもが素直、地域の協力、生徒指導案件が少ないなど）を生かし、教師の指導力向上の研修の機会を多くする取組を小中校長会が組織的に進めている。特に若手教員の研修の充実により、人材育成につながると共に本域内で勤務するメリットを感じ広げてもらうことで、異動交流による人材確保にもつなげたいと考えている。

3 むすびに

次年度も今年度同様の研究課題で取り組む予定である。その中で「生徒指導主事の研修」の充実を考えている。このことは、いじめ・不登校の未然防止の体制整備につながり、かつ若手教員の指導力の向上にもつなげると考える。

「理想の教育ができる南会津」を研修意欲満々の若手教員に推していただければ、本支会の課題である「人材確保」にもつなげると考えている。ぜひ、お願いしたい。

相
馬**学校評価を活かす**～教育の質の向上を目指して～
南相馬市立原町第二小学校 横山 雄彦**1 はじめに**

相馬支会は 2 市 1 町 1 村の小学校 23 校、義務教育学校 1 校、計 24 校の会員で構成されています。今年度は新たに 9 名が入会し、相談や協力、研究体制を整えながら活動を進めてきました。

2 今年度の取組**(1) 研究の推進**

本支会では、第 2 分科会【評価・改善】において、研究主題「教育活動の活性化を図る学校評価及び学校運営の改善に向けた校長の在り方」のもと、視点 1 「教育の質の向上を目指した学校評価」について、昨年度より研究を進めています。本年度の安達大会では相馬支会の研究を発表いたしました。

内容としては、①児童用アンケート項目の共通化、②アンケート結果に基づいた学校課題の明確化、③課題改善に向けた校長としての取組を研究の方向性として定め、支会内児童用アンケートの質問内容の分析、アンケート項目の共通化を行いました。

共通 4 項目の質問文

- ①知「授業中すすんで学習していますか」
- ②徳「まわりの人にやさしくしていますか」
- ③体「体を動かすのは楽しいですか」
- ④情「学校は楽しいですか」

成果としては、共通 4 項目の支会内平均値を出し、平均を上回った学校の取組や校長の働きかけを優れた事例としてまとめました。

(2) 次年度の研究

来年度からは第 IV 期の研究がスタートしますが、相馬支会は東北連小の発表も予定されていることから、引き続き、これまでの研究を進めていくことにしています。効果的な学校や校長の取組を Good Practice として紹介できればと考えています。

3 むすびに

相馬支会 2 市 1 町 1 村の小学校には、地域や児童にそれぞれの実態があります。各学校のよさが輝くようこれからも協働的に研究を深めていきたいと思ひます。

双葉

双葉ならではの教育

～双葉の教育の灯をともし続ける～
 広野町立広野小学校 奥山 吉範

1 はじめに

第2期復興・創生期間に入った双葉地区の復興は、着実にその歩みを進めているものの、根強い風評と震災の記憶や教訓の風化も重い課題となっている。また、近年、統廃合が進み、地元での学校再開を果たしたものの、極少人数での教育活動に苦心されている小学校も多い現状にある。

2 今年度の取組

- (1) 支会研修会（通年）
「教職員の参画意識を高揚する活力ある組織・運営」について共同研究
- (2) 講演会（郡中学校長会と共催）
7/11(金) 福島県教育庁相双教育事務所長
12/5(金) JFA アカデミー福島 統括ダイレクター 山口隆文 氏
- (3) 東日本大震災被災地視察・懇談会
9/18(木)・19(金) 県小学校長会と協力し開催（全国連合小学校長会・県外都道府県校長会・県小学校長会事務局・相馬双葉支会 計50名参加）
- (4) 第12回ふるさと創造学サミット2025
11/29(土) 双葉郡教育復興ビジョン推進協議会と連携して実行委員会を主催
- (5) 小学校絆づくり交流会
7/29(火) 双葉郡教育復興ビジョン推進協議会と連携して実行委員会を主催

3 むすびに

双葉郡の学校は、復興推進加配や採用試験の相双枠、被災校勤務のみなしなど、手厚い配慮もいただいている。課題を弱みと捉えず逆に強みに換えて、双葉の学校で学ぶ子どもたちのために「双葉ならではの教育」を進めていかなければならない。双葉郡小学校長会では、そんな現状を多くの方々に伝えていくとともに、児童一人一人が将来への夢と希望を持ち、地域の復興に向けた参画者となるよう今後も様々な取組を行っていききたい。

いわき

いわき市小学校長会を振り返って

いわき市立植田小学校 和田 裕二

1 はじめに

令和7年度の本支会は59名(中学校長との併任2名を含む)の会員でスタートしました。市小学校長会の活動目標を「ともに学び、助け合い、子どもたちの幸せのために『変革』する校長会」と定め、いわきの未来を担う子どもたちの健やかな成長の実現に向けて、校長一人一人の英知を結集して活動してきました。

2 今年度の取組

- (1) 主な年間行事
 - 4月 いわき市小学校長会総会
第1回小学校長会役員会
 - 7月 東北連小秋田大会(27名)
いわき市小学校長会研究協議会
第1回校長研修会(講師;三浦浩喜氏)
 - 8月 県小学校長会研究協議会安達大会(57名)
第2回小学校長会役員会
第2回校長研修会(講師;大野大輔氏)
 - 9月 第3回小学校長会役員会
 - 10月 全連小福岡大会(3名)
 - 11月 第3回校長研修会(講師;栗山和大氏)
 - 1月 いわき十日会
 - 2月 第4回小学校長会役員会
 - 随時 行財政・研究・広報・生徒指導各専門部会

この他に、校長会主催行事として、陸上競技大会、理科作品展、造形・書写展等の運営をおし、子どもたちの豊かな心の育成、体力・運動能力や学力向上などに向けて取り組みました。

(2) その他の取組

① 組織との連携

教員の働き方改革の推進や各種課題の解決に向けて、中学校長会や行政等と積極的に連携してきました。また、市内4つの支部ごとに支部長を中心とした各支部内での意見交換や情報共有により、組織的な取組を進めています。

② 人材育成

校長会主催の指導会を実施し、教頭やミドルリーダー等の人材発掘や育成に取り組みました。また、様々な教育課題に対する管理職の学校経営力を磨くため年3回の研修会を実施し、資質向上に努めてきました。

3 むすびに

今後も、各校長の創意ある学校経営のもとにより組織的に機能する校長会を創るため、さらに努力していききたいと考えています。

変わらないために、変わっていく

いわき F C 代表取締役 **大倉 智** さん

いわき FC 代表取締役の大倉智（おおくら さとし）さんは「スポーツを通じて、社会価値を創造する」という哲学のもと、地域とともに歩むクラブづくりを進めてこられました。

Jリーグ参入を果たした現在も、子どもたちへのスポーツ振興や、地域活性化、教育との連携など、多岐にわたる活動を展開しています。スポーツの力で人とまちを育てるという強い信念は、教育現場にも大きな示唆を与えてくれます。



○ どのような活動をしていますか。

いわきスポーツクラブ（いわき FC）はこのたび、設立 10 年を迎えました。ここまで支えてくださった皆様に、あらためて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

私たちは「スポーツを通じて社会価値を創造する」をミッションに掲げ、スポーツを通じて地域の「人づくり」「まちづくり」に貢献していくことを目指しています。

いわき FC は「浜を照らす光」になりたい。次の 10 年も、地域とともに歩み、走り続けます。

○ 信条としていることや活動の原動力を教えてください。

いわき FC は、Jリーグで戦うプロサッカークラブである前に、東日本大震災という大きな悲しみを出発として生まれたスポーツクラブです。

「震災で傷ついた浜通りの人たちの心に寄り添い、勇気を与える存在になる」

これは創設当初から持ち続ける思いであり、試合に勝つこと、Jリーグで戦うことは、その思いを実現するための手段と考えています。このスタンスがブレることはありません。

一方、いわきスポーツクラブが 10 年後、どんな姿になっているのか。

そのイメージはクラブのビジョンが「いわき市を東北一の都市にする」から「浜を照らす光となる」という言葉に進化したように、日々変わっていくと思っています。

つまり「変わらないために、変わっていく」。

変わらぬ思いを持ち続けるために、時代の流れに応じて柔軟に変わっていく。そんな姿勢が大事だと考えています。

○ 福島の子どもたちに伝えたいことをお願いします。

「ムーンショット」というマーケティング用語があります。これは、1969 年にアメリカが月面着陸したことに由来があります。壮大な夢で極めて困難だが、達成すれば社会に革新的なインパクトを与えるというマーケティング用語として、今では使われています。

大きな夢ややりたいことを文字にして、毎日それを見て、今を大切に、粘り強く、夢に向かって頑張っている感じです。

プロフィール

1969 年、神奈川県川崎市出身。東京・暁星高で全国高校選手権に出場、早稲田大で全日本大学選手権優勝。日立製作所（柏レイソル）、ジュビロ磐田、ブランメル仙台、米国ジャクソンビルでプレーし、1998 年に現役引退。引退後はスペインのヨハン・クライフ国際大学でスポーツマーケティングを学び、セレッソ大阪でチーム統括ディレクター、湘南ベルマーレで社長を務めた。2015 年 12 月、株式会社いわきスポーツクラブ代表取締役就任。

秋の叙勲

本会元会員の令和7年度「秋の叙勲受章者」は次のとおりです。
なお、規定により祝電をお送りいたしました。

☆瑞宝双光章（4名）

佐藤 吉郎 様	元 福島市立福島第三小学校長
沢 宏一 様	元 いわき市立平第一小学校長
長尾 順一郎 様	元 福島市立森合小学校長
原瀬 久美子 様	元 大玉村立玉井小学校長

文科省教育者表彰

◆ 文部科学大臣教育者表彰（1名）

鈴木 正和（鶴城）

◆ 学校教育功労者表彰（5名）

小野 真教（清明） 鈴木 正和（鶴城）
五十嵐博也（鶴城） 栗木 孝直（田島）
渡辺 貴生（平五）

◆ 永年勤続功労者表彰（20名）

穂積 浩（福島一）	石川 淳（渋川）	菅野智香子（旭）	豊島美喜子（糠沢）
三坂 克典（永盛）	先崎真奈美（広戸）	葛岡 丈治（湯本）	高宮 秀徳（小平）
阿部 弘行（岩江）	大河原康隆（中郷）	岩橋 健紀（荒館）	大西 健夫（上三宮）
塩生 敬久（高郷）	菊池 理文（館岩）	坂本 剛（八幡）	目黒 信浩（中村一）
新野賢一郎（石神一）	有働 幸江（永崎）	吉田 明史（錦東）	瀧田 和也（勿来二）

県教育・文化表彰

◆ 地方教育行政功労者表彰（1名）

丹野 学 様（元 二本松市教育長）

◆ へき地教育功労者表彰（1名）

白井 秀行（桧沢）

令和8年度の主な予定

- 小学校理事会（4/20・6/12・8/19・12/2・2/22）
- 行財政部調査（5月）
- 生徒指導部調査（6月）
- 第55回研究協議会支会大会（各支会計画による）
- 被災地視察・懇談会（9/16・17）
- 要望活動（9月）
- **R9全連小福島大会実行委員会（10回程度）**
- ◆ 第66回 東北連小 宮城大会（7/2・3）
- ◆ 第78回 全連小 北海道大会（10/1・2）

令和9年度は いよいよ
**全国連小小学校長会研究協議会
福島大会** です！
令和9年10月7日・8日
ビッグパレットふくしま

（一財）福島県教育会館事業ご案内

福島県教育会館の下記事業につきまして、ご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます。

- 夏休みの友（休刊） ● 福島県高校入試問題集
- 福島県書きぞめ展 ● 教育関係者名簿
- ◆ 貸会議室（教育関係者は半額）

福島市上浜町 10-38 office@kyouikuikaikan.jp
TEL 024-523-0206 FAX 024-523-0208

編集後記 会員の皆様のご協力により、令和7年度の福島県小学校長会広報部の活動を計画に沿って滞りなく進めることができました。ご多忙の中、玉稿をお寄せいただきました皆様方に心より感謝申し上げます。

- 発行 福島県小学校長会
〒960-8107 福島市浜田町4番16号 富士ビル2F
TEL 024-534-5411
会長 小野真教（福島市立清明小学校）
- 編集 長澤昭仁・丹治達也・下重祐三・片平智幸・小野忠大